

## まえがき

平成2（1991）年に学内共同利用施設として発足した名古屋大学年代測定資料研究センター（以下、年測センター）は、平成12（2000）年3月に10年の時限を迎える。本センターでは、自己点検・評価の一環として、タンデトロン加速器質量分析計を利用した研究の学際シンポジウムを毎年開催し、その講演内容を含めた論文集を業績報告書として年度末に出版している。今回、ここに名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（IX）を刊行する運びとなり、ご協力いただいた関係各位に深く感謝の意を表す。

今年度は、年度末の学際シンポジウムとは別に、本センターの10年の時限をにらんで、平成9（1997）年7月に本格的な外部評価を実施した。外部評価委員は、国外2人、国内3人の5人で、ロバート・シュナイダー（米国・ウッズホール海洋科学研究所、国立海洋科学加速器質量分析施設・副主任）、ウォルフガング・クレッチマー（ドイツ・エアランゲン大学、物理学研究所・教授）、今村峯雄（国立歴史民俗博物館・教授）、小林紘一（東京大学原子力研究総合センター・助教授）、柴田康行（国立環境研究所、化学環境部動態化学研究室・室長）をお願いした。これらの外部評価委員は、いずれも、タンデトロン加速器年代学および関連分野におけるフロントランナーである。外部評価委員からは、年測センターのこれまでの研究業績についての評価だけでなく、今後の研究展開や研究体制の問題点について有益なご意見をいただいた。

年測センターには、昭和57（1982）年に導入されたタンデトロン加速器質量分析計1号機のほかに、昨年度、より性能の高い新型の2号機が設置された。2台のタンデトロン加速器年代測定装置を有する施設は世界中で名古屋大学の年測センターだけであり、この特徴を最大限に生かした新たな研究展開を模索中である。その基本構想は、 $^{14}\text{C}$ よりも半減期の長い $^{10}\text{Be}$ や $^{26}\text{Al}$ などを用いる新しい年代測定法の確立とともに、K-Ar法やU-Pb法等の年代測定もできる研究体制を整え、現在から地球の誕生までの過去46億年間に起こったあらゆるイベントの年代解析ができる総合年代測定センターへの改組である。そして、これまでの実績をふまえ、さらに大きな研究展開を目指している。

名古屋大学年代測定資料研究センター長  
足立 守